

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 黒子葉子

黒子葉子氏の博士論文「ドイツ語反使役動詞の語彙意味論的研究」の審査結果について報告する。

本論文の目的は、ドイツ語の反使役動詞 (anticausative verbs) の意味的特性を日・英・仏・伊語の反使役動詞との比較も行いながら明らかにし、その結果を語彙意味表示に移すことによって、語彙意味論上の根拠を示すことにある。

本論文は、7章から構成されている。まず、第1章では、議論の前提として、先行研究における、さまざまな言語における反使役の概念を検討し、形態的特徴に基づく定義や「起動」(inchoative)などの語彙的アスペクトとの混同が起きやすい定義ではなく、「対応する使役動詞を持つ状態変化動詞」を反使役動詞とする意味論的定義を採用すべきことが述べられる。また、ドイツ語では、*Johann zerbrach die Vase. / Die Vase zerbrach.*のように反使役事象が自動詞によって表されるもの(以下、IAと呼ぶ)と、*Johann öffnete die Tür. / Die Tür öffnete sich.*のように反使役事象が再帰動詞によって表されるもの(以下、RAと呼ぶ)の2種類があることが確認される。

第2章では、IAとRA、およびIAとRAの両用法を備えた特殊な動詞(RIA動詞)についての語彙リストが先行研究を補う形で作成され、完了の助動詞選択(*sein*か*haben*か)、および派生のタイプ(形容詞派生、名詞派生、接頭辞付き)に従って分類された結果、IAが*sein*支配、RAが*haben*支配であること、派生のタイプはIAとRAの区別に対して一定の対応はあるものの直接は関係しないことが確認される。

第3章では、先行研究における反使役動詞の意味的分析を検討し、使役と反使役が派生的に関連付けられるとする派生的アプローチの代表として Levin and Rappaport Hovav (1995)を、両者の間に派生関係を認めない非派生的アプローチの代表として Alexiadou et al. (2006)を検討し、派生的アプローチがより優れているが、現在の派生的アプローチによってすべての言語の使役交替を説明することはできないので、これをより細密化していくことが有望な方向であることが示される。

第4章では、ドイツ語の反使役動詞の意味的な特性をさまざまな先行研究における分析を適用しながら考察している。まず、ドイツ語と同様にIAとRAの両形態を持つイタリア語とフランス語においては、IAとRAの違いが動詞の含意する有界性(telicity)の違いと結び付いているとされるが、有界性によってドイツ語の反使役動詞を適切に捉らえることはできないことが示される。また、ドイツ語の反使役動詞研究では、IAとRAの違いが、特定の前置詞句・副詞句との共起を許すか否か、あるいは、当該文中の自由与格(free dative)が外的な使役主としての解釈を許すか否かに対応するという主張があるが、それらの主張に対する反論として Schäfer (2008)と大矢 (2008)を検討し、これらの主張が妥当しないことが示される。

第5章では、ドイツ語のIAとRAの違いは、「対象物の本質的变化」の有無という意味的な違いにあるという一般化が提案される。つまり、ドイツ語のIAによって表される状態変化は、対象物に本質的な変化が生じることを含意するのに対し、RAによって表される状態変化は、そのような変化を含意しない、と主張される。この主張は、ドイツ語の反使役動詞を43の意味グループに分けて、インフォーマントによるパラフレーズテストを行うことによって検討され、若干の例外を除いて、この主張が妥当することが確認される。この結果、大部分のドイツ語の反使役動詞のIAとRAの違いのみならず、形態的な分布の傾向、先行研究で未解決となっていたRIA動詞および自由与格の解釈についても適切な説明が与えられることが示される。例えば、自由与格の非意図的使役主読みを許す例外な場合は、「不可逆性」が介在しているのであり、「対象の本質的变化」の点からは例外として扱う必要がないことが指摘されている。

第6章では、RAとIAに異なる語彙意味表示を提案する。まず、被動者項に使役主項と同一指示を与えることで使役主項の実現をブロックする操作として、再帰化を定式化し、この操作を適用することで、RAが使役構造からの派生形として分析される。また、IAには、脱他動詞化の操作を適用し、使役主項を語彙的に束縛することで、項構造への投射を妨げるものと分析される。さらに、日本語の接尾辞 $-ar$ を伴う反使役動詞と、接尾辞 $-e$ を伴う反使役動詞が $te-iru$ 構文において示す有界性の解釈が、ドイツ語の反使役動詞では現在完了形において観察されることを上記の語彙意味表示の裏づけとしている。

最後の第7章では、本論文の結論と今後の展望が述べられる。

本論文は、従来、十分に動機の説明がなされてこなかったドイツ語の反使役動詞の形態的な相違について「対象物の本質的变化」という新しい観点から根拠のある説明を与えたこと、その語彙意味表示を考案して理論的な面からも動機付けたこと、また、ドイツ語の反使役動詞が日本語の反使役動詞と語彙的アスペクトの解釈に関して類似した振る舞いを見せることを指摘し、反使役の普遍性への展望を示したことなど、今後の研究に示唆するところが多くある。

審査委員からは、「対象の本質的变化」の判断が主語名詞句とも関係している場合や文脈によって揺れ動く場合があること、反使役形が自動詞しかない動詞や使役形を持たない自動詞についても考察を広げればより有意義な一般化が得られる可能性があること、提案された語彙意味表示はより細密化できる可能性があることなどが指摘された。

しかし、本論文は、残された課題はあるものの、基本的な主張部分の独創性においても、十分な量のデータの精緻な分析においても、論述の正確さにおいても、課程博士論文として十分なレベルに達しているとの結論となった。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。